

「あ・・・伊吹・・・あ・・・で、出る、出る、出る、で・・・んああ！」  
レヴィアタンは控え目なあえぎ声を上げながら自身の陰茎を包む使い捨てオナニーホールの中に射精をした。

射精をした時独特の解放感が収まるとオナニーホールの中から精液と性感ローションがこぼれないように抜くと、いつもと同じようにキャップをはめてティッシュと共にゴミ箱に投げ捨てた。

「はあ・・・。」

ベッド代わりにしているバスタブのへりにもたれかかり視線を上げると、巨大な水槽の底でペットである金魚のヘンリーがじっとしていた。

天井を見上げればクラゲのオブジェが海の中をイメージした青くほの暗い光の中をふわりふわりとただようように揺れている。

何も変わらないいつもと同じ光景だった。

なのにレヴィアタンの脳内ではふとよぎった先日の光景を発端にいつものとってもネガティブで不毛な自虐の雨嵐が始まっていた。

レヴィアタンは身なりを整えバスタブに体を横たえると、頭から毛布をかぶってどうして自分はゴールドヘルファイアイモリ・シロップの媚薬効果を消すため自分の部屋に現れた伊吹の期待に答えることができなかったのだろうと、本当に今頃のような後悔をしていた。

伊吹はあの時本当に「レヴィイになら襲われてもいい」と口にし、その媚薬効果を消すために下した命令は「キスをして」だった。

これはすなわち伊吹からのレヴィアタンに対する愛の告白であり、自分が何より特別な存在であるという事の明確過ぎる証明だった。

レヴィアタンは慣れない展開が急激に来て慌てていたとはいえどもあの時全く気の利いた事ができなかった自分の頭を鈍器で殴ってしまいたい気分になっていた。

キスは強引過ぎたし、ゴールドヘルファイアイモリ・シロップの効果が切れる直前に怒りにも似た感情に任せて伊吹を犯そうとしていた自分が記憶の中にあった。

あの時ハッと我に返って伊吹から体を離れたのは今でも正しい行為だったとレヴィアタンは思っていたが、思い返せば伊吹は間違いなく自分に対して好意を持っていて、それは性行為を望む気持ちとも繋がるものだった。

ならいっそ、あのまま勢いに任せて犯してしまっても良かったのではなかっただろうか？

現に今もこうやって伊吹に対する恋愛感情と性行為に繋がる気持ちを持って余し、もんもんと想像の中にいる彼女を相手に自慰行為に及んでいる。

(僕だってHしたことがない訳じゃないのに・・・なんてチキンなんだ！)

レヴィアタンの心はきしむように締め付けられ伊吹に対する愛おしさをふくんだ切なさで胸が張り裂けそうになっていた。

レヴィアタンは体を丸めるとため息をついた。